慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミス書誌
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.9 (1940. 9) ,p.1297(117)- 1332(152)
JaLC DOI	10.14991/001.19400901-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400901-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミス書誌

三邊清一郎

近世經濟學の父アダム・スミスがエデキンバラの自邸パンミュア・ハウスにその榮えある生涯を終つたのは、一七九〇年七月十七日である。慶應義塾大學經濟學部、理財學會及び圖書館ではこれを紀念して六月十七日より六日間「アダム・スミス歿後百五十年紀念展覽會」を開催した。本文は、高橋誠一郎教授指導の下に直接同展覽會陳列の衝に當つた筆者が、その準備のため筆を執つたものである。

一

アダム・スミス最後の日は、小泉信三博士の筆によつて、次のやうに叙述されて居る。——

一七九〇年の春、スミスは自ら餘命の久しからざることを感じた。此時彼れの心を煩すものは其原稿の處置であつた。彼は其中公刊に堪へると認めた若干のものを除くの外擧げて之を破棄せんと欲し、此事を其親友ブラック及びハットンの二人に托したが、猶ほ安ずるに至らず、七月の或日態々二人を呼んで、即座に原稿十六卷を燒却せんことを請ひ、二人は其内容を知らず、また之を問ふこともしないで依頼の通りを實行した。スミスは非常に安心して、それが多分日曜であつたのであらう、例に依て友人が來訪すると、スミスは猶ほ出て客に接する丈けの元氣があつた。併し友人等に促されて彼れは九時半頃中座して寢室に退いた。其時スミスは別を告げて、「吾々は此會合を別

の場所に移さなければなるまい」と言つたとハットンは傳へてゐる。……スミス邸の日曜日の夜食會はこれが最後であつた。超えて約二週間、一七九〇年七月十七日の土曜日にアダム・スミスは六十七歳を以つて逝き、遺骸はスミス邸から程近きキヤノン・ゲエトの墓地に葬られた。」（同博士「アダム・スミス、マルサス、リカアドオ。」昭和九年二〇四―〇五頁。）

彼の死後を偲んで描く書誌には、この燒却された原稿から筆を起すのが相應しいであらう。私はこの文章を讀むとき、ラフカデイオ・ハーンの小篇「葬られた祕密」を想ひ出さざるを得ない。そこでは讀んだ人達だけが知る祕事が物語られて居る。こゝでは書いた人だけが知る祕密が話されて居る。一體この焚書によつて何が失はれたのであらうか。それは彼の「最も親しい友人にすら知られ」なかつたものであり、樣々に憶測されて居る。スミスが倫理學教授として初めてグラスゴウ大學に迎へられた時、彼は學生の注意を、教科書風な論理學、心理學よりも、もつと興味ある有益な研究に向ける必要あることを知り、心の力を概觀し、推論の技術的方法に關して好奇心を滿足さすに必要なだけ古代論理學を説明した後、殘餘の時間は悉く修辭學及び美文學大系の教授に當てた。そして「この問題に關するスミス氏の講義を含む草稿が、氏の逝去前に破棄されたのは甚だ殘念である。最初の部分は構想の點に於いて完成に近いものであり、全體は趣味と獨創の特徴の強いものであつた」といふのが、彼のグラスゴウ大學に於ける學生で後にその同僚となつたジョン・ミラアの回想である（Dugald Steward: Account of the life and writings of Adam Smith. LL. D. in "Essays on philosophical subjects. By Adam Smith." 1795. p. xvi.）。躬ら燒却の任に當つたハットンは「講義の全卷の處分」を托されたと言ひ（Ibid. p. lxxxviii. note.）、ステュアートは「その中に一七四八年エデヰンバラで朗讀した修辭學の文章、グラスゴウに於ける彼の課程の一部を構成した自然宗教及び法學に關する講義があつたことは疑ひない」とし（Ibid., p. lxxxvii.）、またボナーは「法律及び政治の一般的原理の説明」、「法學及び自然法の理論」及びその歴史に關する草稿があつたらうと推測して居る（James Bonar A catalogue of the library of Adam Smith. 1894. p. xiii. 2. ed. 1932. p. xv.）。

スミスが自分の手で公にしたものは「道德情操論」（一七五九年）と「國富論」（一七七六年）だけである。しかし彼にはこの外に猶ほ大規模の著述の計畫があつた（後述參照）。それ等に就いて幾多の原稿の草せられるものがあつたであらうことは、容易に想像されるだらう。彼は一七七三年の春國富論の原稿を携へて倫敦に上つた時、親友ヒームに宛てゝ次のやうに書いた。

「予は予の一切の原稿の管理を君に託せるが故に、予が自ら携帶するものの外は、降つてデカルトの時に至る迄相次いで行はれたる天文學の諸體系の歴史を含む大なゝ著述の一斷片を除けば、一も出版に値するものなきを告げねばならぬ。此を青年時代に計畫せられたる著作の一斷片として出版すべきや否や、予自ら其或部分には堅實よりも多くの洗練あることを疑ひかけてゐる者ではあるが、そは一に全く君の判斷に委する。此小著作を君は予の書齋の書き物机の中の薄き二つ折紙本中に見出すであらう。此机の中、若しくは予の寢室に立てる机の玻璃製開き戸の中に見出さるべき一切の他の無綴の原稿、及び同じく同じ玻璃戸中に見出さるべき約十八冊の薄き二折本は、何れも吟味することなしに破棄せられんことを欲する。」（四月六日。小泉博士、前揭書、一〇七―〇八頁。）

こんな手紙が書かれたのは、彼が國富論著述の勞作に甚しい心身の衰へを感じ、突然の死を豫想したからに外ならないが、しかし彼は猶ほ長く生き、國富論を躬らの手で出版した丈けでなく、自著の著しい改訂にも從つたのである。他の草稿に就いては友人によつてこの樣に言はれた。スミス博士はいま（一七八一年）その道德情操論並びに國富論の改訂に從事しつゝある。この新版では著しい變更と改良が行はれるだらう。「彼は批評及び文學上の問題に關する論文を、あるものは完成し、しかし大部分は全く完成されないで、側らにもつて居る。彼がそれを世に贈ると

とを考へる日には、彼はそれによつて著者としての彼の從來の名聲を損ふことはあるまいと信ずる。」(William Robert Scott: Adam Smith as student and professor, Glasgow, 1937. p. 284.)。彼自身も一七八〇年に丁抹の一友人に近況を報じて、私の現在の地位は全く惠まれたものである。唯々殘念なのは職務により文筆が妨げられることである、「私が豫ねて計畫する數個の著述は、そうでない場合よりも遙かに遲らされる模樣である」と書き(Ibid. p. 284.)、また晩年リデルに、自分は殆んど何もして居ない。しかし「もつとして置きたかつた。私の原稿の中には大へん利用できる材料があるのだが、しかしそれも今となつては問題でない」と歎じたと傳へられる(Essays p. lxxxix.)。

彼が夙くから未定稿の破棄を志したことは前に述べた。彼のこの素志は終始易るところがなかつたものである。一七八七年後の最後の發病の少し前倫敦に上つた時にも友人に彼死去の際は講義の全卷は破棄し、爾餘の草稿はその好むところに從つて處置されたい旨委囑したといふことである(Essays p. lxxxviii note)。彼がかやうに未完成の原稿の破棄を執拗に固執したには、或はその發表は既得の名聲を害するといふ、當時の知識人の間に行はれた通念が働いて居たのかも知れない。(註)しかし私は、重要な議論に公平でないため、眞理を促進するよりも寧ろこれを阻害しないかといふ懸念が、幾多の著者をしてその極めて貴重な未完成の勞作を世に問ふことを控へさせた。彼の場合も一にはかゝる學者的良心からであらうとするステュアートに同意する。(Essays p. lxxxviii)

（註）ジョン・ミラアがスミスの後嗣ダグラスから後事を相談された手紙の返事に次のやうに書いて居る。「若しもそれ等の草稿が完成して居なかつたとすれば、その公表を差控へるのが正しい。蓋し既に高い名聲を得た著者は、新しい出版で失ふところが多く、得るところは殆んどないからである。誰れでも人はいゝ本を一册書くと、もう一册を書くことは骨折を儲けるだけだと考へる。然るに彼が死ぬと、第一の著作が幸せなヒットとなるのである。ジョン・ヒュームが「ダグラス」の外筆を執らなかつたとしたら、仕合せだつたらうと。(W. R. Scott: Adam Smith p. 312.)。しかし彼自身はスミスの手稿の燒却を最も惜しむ一人であつたのである、――「しかし私は決して、スミス氏の手稿が同じ考へを作ふものと思ふのでない。寔に私はその反對であることを知つて居る。それ等に恐らくより不正確、若しくは少くとも構造において少しく劣るところがあつたのであらうが、天才――最高級の天才――の同一特徴を具へて居たことであらう。」(Ibid., p. 312.)

この燒却を免れた諸稿は、彼の生涯を記念して、一七九五年ジョシッフ・ブラック及びジェームス・ハットンの手で――ヘンリ・マッケンジイもこれを扶けた――編輯公刊された。(註一)「哲學問題諸論文」Essays on philosophical subjects. By the late Adam Smith, LL. D. Fellow of the Royal Societies of London and Edinburgh, etc. To which is prefixed, an account of the life and writings of the author; by Dugald Steward, F. R. S. E. London: for T. Cadell Jun. and W. Davies (successors to Mr. Cadell) in the Strand; and W. Creech, Edinburgh, 1795. がすなはちこれである。この遺稿編纂の企は彼の死の直後その遺族、友人間に考慮されたものらしい。一七九〇年八月十日にジョン・ミラアはダグラスに宛てゝ「スミス氏の文章が一部日の目を見ることになるらしいと聞くのは欣ばしい、――とふのは、私は貴君や顧問達がこの方面に全幅の力を用ひられることを希望するからである」と書いて居る(W. R. Scott: Adam Smith. p. 312.)。(註二)また出版上の具體的經緯を示すものとして、一七九二年十二月(二十一日)出版者カデルがマッケンジイに宛てた次の手紙が殘つて居る。「十二日附書簡は正に落手、スミス氏の遺稿に就いての私の前便が御手許に屆いて居ないことを知つて大へん驚いて居ます――それは貴君の第二の手紙の返事として八月三十一日イーストバアンから書いたものです。文學的著作に價値を置かないのがスコトラアン氏及び私の永い間の

既定の方針です、――私達は著者の申出を受け、それからその申入れが受諾できるかどうか判定するのです、――しかしこの場合私共が、貴君の御考へに對して次の申込をするのは、スミス氏の追憶に對する吾々の敬意であり、貴君に對する信頼からです。すなはち初版は四折版で一千部を印刷し　私共はそれに對して三百磅を支拂ふ、そしてこの本が再版に附せられる場合には私共は更に三百磅を支拂ふことを承諾します。」(Ibid., p. 314.)

（註一）ブラック Joseph Black 及びハットン James Hutton はそれ〴〵當時に於いて勝れた化學者及び地理學者である。後者には「地球論」Theory of the earth. 1795. の著がある。（「學燈」昭和十四年九月號一七頁―）レエはこの二人を、スミスと共に「近代化學、近代地理學、及び近代經濟學の父と呼んでいゝ人達」だと言つて居る。彼等はスミスとは毎金曜日エデキンバラの一料亭で午餐を共にする間柄であつた。この二人はまたスミスの遺言執行人となつた(John Rae: Life of Adam Smith, 1895. p. 334-37; Essays. p. xcv.)。マッケンジイ Henry Mackenzie には The man of feeling の著がある。スミスが最後の日曜日の晩餐會を退く際殘した「紳士諸君、私は諸君〳〵との交際を愛する、然しながら私はあの世へ赴くが爲めに諸君とお別れしなければならぬと思ふ」といふ言葉を傳へて居るのは彼である(高橋誠一郎教授著「經濟思想史隨筆」昭和十五年、一六五頁)。

（註二）一七九〇年八月十四日D・ダグラス宛ラフバラ卿書簡參照。(W. R. Scott: Adam Smith., p. 313.)

この論文集には、天文學の歴史、古代物理學の歴史、古代論理學及び形而上學の歴史によつて例示せられる「哲學的研究を嚮導指示する諸原理」に關する三論文、及び「所謂模倣藝術に行はるゝ模倣の本質」、「音樂舞踏及び詩歌の類同」、及び「五官」を論ずる三篇が收められて居る。その大部分は、編者の言ふやうに、「彼が嘗て立案した、高等諸科學及び優美なる諸藝術の連絡ある歴史を書かうとする計畫の諸部分を成す」ものゝやうである。この計畫は久しい以前に廣汎に失するものとして放棄されたのであつたが、これ等の部分はその長逝に至るまで側に横へられ、死の直前公表に適せずと考へる諸稿を破棄させた際に、「その適當と認めるところに從つて處理するやう友人の手に殘した」ものである(Essays, Advertisement.)。そのうち天文學の歴史と模倣藝術に關するものは、特に彼の期待するものであつた。これに就いてラフバラ卿は次のやうに書いて居る「氏の未刊諸著述の處置は、氏からその大部分破棄する心算りだと聞かされて居たのだから、正に私の豫ねて期するところである。しかし天文學の歴史とその模倣藝術に關する論文には、氏は特に期待を懸けて居た。後者は私は氏が倫敦に居た際に見た、しかし爾來若干變更を加へられて居ることゝ思ふ。前者は長く見ない。しかし氏の談話から氏がその訂正に從つて居たことは知つて居る。」(W. R. Scott: Adam Smith. p. 313.)

若干のノートと覺書を殘して居ることから、彼がこの天文學の歴史の最後の部分は不完全で、數箇の追加を必要とすると考へたことが明かである」と言はれて居るけれども(Essays. p. 93.)、彼自身によつては夙くから「出版に價する」唯一のものとさへ考へられたことは、前掲一七七三年のヒューム宛書簡によつても明かである。この論文はその末尾に於いて「一七五八年に出現すべき」彗星に觸れて居ることから、それ以前に執筆されたものであることが推測されて居る(Ibid., p. 90 and note.)。

模倣藝術に關する論文は、もとグラスゴウ文學會講演（註一）のために準備せられたのである。しかしその際完成されたのは最初の二部だけであつて、舞踊を取扱ふ第三部は完了されなかつた。「彼は模倣藝術に就いて企てた論文の二つをグラスゴウに於ける吾々の會のために講讀した。しかし第三部はその時完成して居なかつた。私はいまそれが出來上つてゐればいゝと思ふ。」(一七九〇年八月十日、ジョン・ミラア書簡 W. R. Scott: Adam Smith. p. 312)。彼自身は、一七七六年國富論公刊後、稅關管理官任命に至る時期に於いて再びこれを取上げたことを言つて居る。(註二)レエが滯佛時代の劇場の見聞がこの問

題に關し彼に幾多の省察の資料を與へたと見て居るのは、恐らく當つて居るだらう(J. Rae: Life of Adam). 本論文は現存の狀態では猶ほ結論を缺くのであるが、ステュアートは、それは吾々が模倣藝術から享ける快感を、主として模倣の困難すなはち「克服されたる困難」difficulté surmonte によつて説明することを目的とするものだと言つて居る(Essays. p. lviii.)。

（註一）グラスゴウ文學會 Literary Society of Glasgow は一七五三年に主としてそこの大學教授を會員として創立された。スミスもその會員及び創立者であつた。彼はこの外この會で一七五二年一月二十三日にヒュームの貿易論に就いて講演した(J. Rae: Adam Smith p. 95; W. R. Scott: Adam Smith p. 82. 312.)。

（註二）一七八〇年十月　A・ホルト宛書簡「其後(一七七三年春以後)四年間倫敦が私の主な住居であつた。そこで私の著作(國富論)を仕上げ上梓した。私はカコウデイの舊閑居に歸り、模倣藝術に關する他の一篇の執筆に從つて居たが、その時にバックルウ公爵の關係で現在の職に任命された。」(W. R. Scott: Adam Smith. p. 283.)

天文學、古代物理學、論理學及び形而上學の歴史によつて例示せらるゝ「哲學的研究を嚮導指示する諸原理」の三篇は、本文集の編者が天文學のそれに就いて言つて居るやうに、主として「スミス氏が哲學的研究の一般的動因たることを指摘したかの人心の諸原理の例證の附加」として見るべきであらうが(Essays. p. 93.)、しかしこの計畫がいつの日に企てられたのか知ることが出來ない。ステュアートは、物理學に關する論文が彼の「最も夙い著作の一の一であること、また燒却を免れた少數原稿の一であることを言つて居るけれども(Essays. p. xiii.)、殘存するものゝ最初なのか、彼の有ゆる述作の最も夙いものなのか、彼の言葉では明かでない。スコットはこれ等はグラスゴウ教授時代の前半に筆を執られたと見るのが蓋然性が高いとして居る(W. R. Scott: Adam Smith. p. 50-51.)。彼はまた同じ箇所及び他の箇所で「英吉利及び伊太利韻文の類同」――その初期の形態を示す草稿の一部が彼によつて複寫されて居る――が恐らくこの時代以前に遡り得ないこと、及び「五官に就いて」がこの時期に書かれたらしいことを、想像若しくは推論して居る(Ibid. pp. 59-61; 50.)。

本書には前記倫敦版の外に、グブリン版(一七九五年)、ストラスバーグ版(一七九九年)、バーゼル版(一七九九年)及び雜版(倫敦一八六九年)がある。また本論文集は一七九七年にP・プレヴオストによつて佛蘭西語に移された。Essai philosophiques; Par feu Adam Smith.....Précédés d'un précis de sa vie et de ses écrits; par Dugald Stewart.....Traduits de l'anglois par P. Prevost Paris, 1797. がこれである。

二

彼は一般に「エデヰンバラ評論」に寄せた匿名の二篇を以つて著作家として文學界にデビューしたものとされて居る(J. R. McCulloch: Sketch of the life of Dr. Smith. (In "Wealth of Nations," new ed. 1839 p. IV.)。しかしこれに先つてなほ彼の筆に成るものと見做さるる一文がある。すなはち亡命詩人ウヰリアム・ハミルトン William Hamilton of Bangour の詩集への序文がこれである。ハミルトンはジヤコバイトに好まれた「グラヅミュアの戰ひへの頌歌」Ade to the Battle of Gladsmuir を書いて名聲を馳せたが、またそれが爲めに國を追はれた蘇蘭詩人である。友人等は彼のために詩集の出版を計畫し、その編輯をスミスに依頼した。後年の哲學者、經濟學者にこの事のあるのは、一見異とせらるるかも知れないが、前節に述べたやうに彼自身に文學的著作があり、エデヰンバラに於いて文學講演をなし、且つその青年時代に詩人たらんと考へたと稱せられることを思ふならば不思議とするに足らない(J. Rae: Life of Adam). 「折々の詩」Poems on several occassions と題せられたこの詩集には、一七四九年のグラスゴウ初版と一七六〇年のエデヰンバラ增訂第二版があり、その第一版序文はこの大哲學者の筆に成り、第二版のそれは確かに彼の文體だとされて居るのである

(Charles J. Bullock, an Essay by, In "The Vanderblue memorial collection of Smithiana. p. v, vi.)。レエはジョン・グリンブル卿が後者の献辭をスミスに書かせるやうに出版書肆に言ひ送つた手紙を引いて居る(J. Rae: Life of Adam Smith. p. 40.)。

けれども一般に確かなものとしては、前述の「エディンバラ評論」に寄せられた匿名の二篇が處女作とされる。しかしこゝに言ふ「エディンバラ評論」は、一八〇二年F・ジェフレエ、H・ブロオガム及びS・スミスによつて復活され、一九二九年まで繼續した第二次「評論」ではない(Ch. J. Sawyer & F. J. Harvey Darton: English books 1475-1900. vol. I. p. 317. The Kenkyusha dictionary of English and American Literature. ed. by Takeshi Saito. p. 224.)。それは一七五五—六年に發行された第一次「エディンバラ評論」Edinburgh Review. Edinburgh, G. Hamilton and J. Balfour. Jan. 1755-Jan. 1756. 8vo. Semi-annual publication. である。蘇蘭に於ける「文化の進歩狀態を時々世間に知らす」目的をもつて、A・ウェッダアバアン Alexander Wedderburn、H・ブレーア Hugh Blair、Dr・ジャアダイン Dr. Jardine、アダム・スミス及びロバアトソン教授 Professor Robertson の若い人達の間に創刊された文學評論雜誌である。それは主に發刊に先つ六ケ月間に蘇蘭で印刷された書物の紹介を載せる筈であつたが、一七五五年の一一六月に對する第一號と一七七五年七月—一七六年一月に至る第二號の發行を見た丈けで廢刊となつた。(Mary Elizabeth Craig: The Scottish periodical press 1750-1789. p. 31, 99. Bibliography, by John P. Anderson. In "Adam Smith" by R. B. Haldane. p. i.)(註)

スミスはこの雜誌の第一號に、サミュエル・ジョンソンの英語辭書の批評 A dictionary of the English language, by Samuel Johnson, A. M, pp. 61-73, を、第二號には、評論の範圍を擴張すべきことを提議する編輯者宛書簡 A letter to the authors of the Edinburgh review. pp. 63-97 を寄せた(James Bonar: A catalogue of the library of Adam Smith. 2. ed. 1932. p. xii; R. B. Haldane: Life of Adam Smith. 1887. Bibliography, by J. P. Anderson. p. i; The Vanderblue memorial collection of Smithiana. p. 48.)。ジョンソン博士の「英語辭典」A dictionary of the English language: in which the words are deduced from their originals, and illustrated in their different

significations by examples from the best writers. To which are prefixed, a history of the language, and an English grammer. vols 2. London, 1755 は、今日の英語の意義が初めて確定された時代に文壇の巨匠の手によつて編輯されたといふ意味で、モニュメンタルな大著と稱せられるものである。スミスは前の寄稿でこの辭書の價値を認め、たゞ若し著者が是認せられない用語を更に多く非難し、また單に一語の數意義を列記するに止めないで、これに等級を分ち、主たる意義と從たる意義とを區別したならば一層改善を見たであらうと評し、自ら witt と humour の二語をとつて模範を書き、その言はうとするところを例示した。但しジョンソンは後の版でこの批評を顧みて居らぬといふことである(小泉博士前掲書五三頁)。

第二の寄稿は、第二號附錄として發表された。本稿では蘇蘭に於いて文學的著作の公にせられるものが猶ほ尠いから、「評論」の範圍を廣めて宜しく重要外國文献にも及ぼすべきであると主張した。彼はこれに續いて當時の大陸文學を批評し、英佛文學の比較を試みた。彼れに據れば、伊太利は已に文學を生むことを罷め、獨逸は科學を生産する丈けで、當時大陸文學とは彼にとつては佛蘭西文學に外ならなかつた。彼は詩から哲學に移り、佛蘭西のアンシクロペヂストは自國のカアテシアンの體系を捨てゝ、英國のベコン、ニュートンの體系を取り、しかも英國人自身よりもより一層有效にこの體系を說明して居ることを知つた。かくて佛蘭西の大百科全書を可なり詳論した後、ビュフオン伯、レオミュルの科學上の近業を紹介し、哲學書では當時恰も公にされたルソオの「人間不平等起源論」を紹介した。彼は本書の要旨を摘要、その數節を譯出し、ルソオはその文章の助けに依り、又少許の哲學的化學と相俟つて「放縱なるマンドヰルの原理と觀念をして一切のプラトオ道德の純正と素直とを有せしめ、且つ眞實の共和主義精神の稍々度を過ぎたものに外ならざるの觀あらしめた」と評して居る(小泉博士前掲書、五三—五四頁。J. Rae: Life of Adam Smith. p. 122-24; M. E. Craig:

Scottish periodical press)。1750-1789. 1931. p. 32.

（註）廢刊の事情はレエの「スミス傳」二二四—二二五頁に詳しい。この雜誌はスミス文獻中最も入手し難きものゝ一である。スミス文獻の蒐集家であつたヴアンダアブリユーは、その一部を所有することは蒐集家にスリルを與へると言つて居る（Homer B. Vanderblue: Adam Smith and the "Wealth of Nations." A adventure in book collecting and a bibliography. 1936. p. 3.）。本誌の所在に就いては、大英博物館、國立蘇蘭圖書館に第一—二號、エデキンバラ公衆圖書館に第一號が保存されて居ることが報ぜられて居る。（The Scottish periodical press. p. 99.）。

本誌は一八一八年J・マッキントッシュが解説と主要寄稿家の名を附して第二次「評論」の形に模して再版を作つた（John Rae: Life of Adam Smith. p. 124; Bibliography, by J. P. Anderson. p. 1.）。この再版も可なり拙いものと思はれ、筆者の知る限りでは、米國議院圖書館、ニューベリー圖書館、北カロライナ大學圖書館に第一號複製、ニューヨーク公衆圖書館及びフイラデルフヰア圖書館會社に複製が藏せられて居ることを知るばかりである（The Scottish periodical press. p. 99.）

猶ほこの外にこの頃に執筆され、しかも一旦はかの死直前に於ける燒却を免れたが、しかし後に至つて等しく同じ運命に失はれた一草稿の存在が傳へられて居る。それは一七五五年グラスゴウのコクレーン倶樂部 Cochrane's Club で講演した草稿であつて（W. R. Scott: Adam Smith: p. 82）、一七九三年一月（二十八日）及び三月（十八日）にダッガアド・ステアートが王立エデキンバラ協會 Royal Society of Edinburg でスミスの業蹟に就いて講演を行つた際に、佛蘭西經濟學者の著作に對し、その「商業及び產業の自由に關する所說」の獨創性を立證するために紹介したものである（Essays. p. lxxvii.）。それはスミスが一七五〇—五一年にエデキンバラで試みた法學講演（註一）の內容と、その頃すなはち彼の利用し得る佛蘭西の著述の存在しなかつた以前に於いて、既に經濟的自由主義を主張したことを示すものとして（小泉博士前揭書、二六頁）、また富の進步の遲滯と、若しも事物の自然的經路の作用を自由に許すならば發生する狀態とを對比する、國富論第三編「諸國民に於ける富裕の進步の差異に就いて」の淵源を成すものとして重要である（W. R. Scott: Adam Smith. p. 56.）。

「人間は政治家及び企業家に依て一般に一種の政治的機械の材料と見られてゐる。企畫家は人事に於ける自然の作用の經路を妨げる。而かも自然をして其自らの設計を確立せしむるには之を放任し、其目的の追求に於て自然に對してフエアプレイを與へる以外の事は必要でない。」

「國家を最低度の野蠻より最高度の富有に導き到らしめる爲めには、平和と輕易なる租稅と相當の程度の司法行政と以外には必要なものは殆ど無い。爾餘一切のことは事物の自然的經路に依て齎される。此の自然的經路を妨げ、強いて之をして別の通路に往かしめ、又は特定點に於いて社會の進步を阻止せんとする一切の政府は不自然であつて、己れ自身を支へんが爲めには必ず抑壓的壓制的となることを餘儀なくされる。」

「本稿に列記せる意見の大部分は、今猶予の手許に存する若干の講義の草稿にして、六年前予の許を去つた一書記の手跡を以て書かれたものゝ中に詳細に論ぜられてゐる。それは皆な予がグラスゴウで過ごした最初の冬に始めてクレエギイ氏の學級に授業した時以來、今日に至るまで何等重要なる變更なく、常に予の講義の主題たり來りしものである。それは皆な予がエヂンバロウを去る前の冬に彼地に於て試みた講義の主題であつたもので、予は彼の地からも此地からも、彼の諸說が予のものであることを十分確證すべき無數の證人を擧示することが出來る。」（小泉博士、前揭書、一二六—二七頁）。

これがステュアートによつて傳へられる草稿の內容の全部である。スミスが如何なる事情の下にかゝる一文を綴つたのか、明かでない。ステュアートは「ある主要政治的及び文學的原理」に對する剽竊を懸念して、「彼の排他的權利の確立を望んだのだ」と言つて居る（Essays p. lxxx.）。そしてこの剽竊の可能性あるものとしては、ボナーその他によつてフアグスン及びロバァトソンが擧げられて居る（J. Bonar: Catalogue, p. xi, 39; 2. ed. p. 68-69.; W. R. Scott: Adam Smith, p. 101, 118-20.）。或はブレーアも加へられるのかも知れない。しかしそれ等はいづれも確實でない。これに就いては恐らく、この時代の冊子をより以上に研究するものが、一層よき解答を與へることが出來るだらうと、解決を將來に期するケーンズの見解が寧ろ當つて居るだらう（J. M. Keynes: Adam Smith as student and professor, in "Economic History," Feb, 1938. p. 43-45. cf. J. Rae: Adam Smith, p. 63-65.）。

この原稿はステュアートが前記講演を爲した時には、現在彼の所有に在つたのであつた。唯々一部協會員にも知られる理由により「本草稿の出版によつて私的不和の記憶を新たにするのは宜しくない」と考へるので、その全文の發表を差控へたのだと言ふ（Essays p. lxxx.）。彼はその後にも二二の機會にスミスの草稿に觸れて在る。その一は彼のエディンバラ大學の經濟學講義に於いてゞあつて（註二）、そこでは、スミスの價格の地代 賃銀及び資本利潤への分割が、「現に私の所有に在るスミス氏の草稿」によつて明かである旨を指摘して居る。（Dugald Stewart: Lectures of political economy. In "Collected works." vol. Ix. 1856. p. 6; W. R. Scott: Adam Smith, p. 119, 320.）他は「スミス傳」の後の版（Biographical memoirs, of Adam Smith, LL. D. of William Robertson, D. D. and Thomas Reid, D.D. read before the Royal Society of Edinburgh. Now collected into one volume, with some additional notes. Edinburgh, 1811.）に於いて、彼が「以前に精讀したスミス氏の文章」中に述べられて居る樣子からオスワルトの學風を說明して居る場合である（p. 121.）。私はこれ等を、それ〴〵同一組のもの〴〵一部と考へるのであるが、それは彼の子のステュアート大佐が數學に關する文書をユナイテド・サービス・クラブ United Service Club へ寄附した殘りのものをすつかり燒いたといふ事實から、失はれたものと信ぜられて居る（W. R. Scott: Adam Smith, p. 117, 120; John Rae: p. 26. Cf. Dugald Stewart, Collected Works of. vol. viii, p. x.）。

（註一）この講演は、彼が「一七四八年とそれに續く二年」（A・F・テイトラア W. R. Scott: Adam Smith, p. 50.）に行つた一聯の公開講演の最終の一部であつて、その草稿は彼の言葉から一七四九年の恐らく夏に作られたのだらうと想像される（Essays, p. lxxxi; W. R. Scott: Adam Smith, p. 51.）。それは從來經濟學講義と考へられたが（J. Rae: Adam Smith, p. 36.）、しかしエデキンバラ講演のこの最後の部分を聽講したジョン・カランダア John Callander が「アダム・スミスは法學生に市民法を敎へた。彼がこゝで與へた講義は、のやうなものであつた」と言つて居ることから、エデキンバラの最終課程が主として哲學的でなく、また經濟學的でもなく、「法律哲學の性質をもつ或物、若しくは其頃『法學』"Jurisprudence"——今日よりも廣い意味に用ひられた言葉——と呼ばれたもの」に關したことが考證されて居る（W. R. Scott: Adam Smith, p. 54-55.）。

（註二）ステュアートが經濟學を政治學から分離して講義を初めたのは、一八〇〇年の冬であつて（Works. vol. x. p. xlviii. cf. p. xlvi-xlix.）、「本講義は主として現世紀の初めにまで遡つて書かれたものに、一八〇九—一〇年——ステュアート氏の大學に於ける勤務の最後の年——までに折に觸れて挿入された增補訂正から成つて居る。」（W・ハミルトン。Ibid., vol. viii, p. vii）。

以上は總てグラスゴウ大學敎授時代に筆を執られたものに就いて述べたのであるが、W・R・スコットの近業「學生及び敎授としてのアダム・スミス」William Robert Scott: Adam Smith as student and professor. With unpublished documents, including parts of the "Edinburgh Lectures, a draft of the Wealth of nations, extracts from

muniments of the Glasgow and correspondence. 1937. にエデキンバラ時代に書かれたと思はれる草稿の四斷片の發見を報告して居る(p. 57.)。これ等はスミスが保存した手紙の中から發見されたのである。彼の未完成諸稿が死の直前破棄されたことは既に述べた。これ等はある時々に、その在るべき場所から移動されて居たゝめ燒却を免れたのだらうと想像される。これを法學講義の順序に當嵌めるならば、第一はグラスゴウ講義(後述)の家族法及び私法に關する章の序論に相當する。(註)第二のものは「古代よりジェームズ五世逝去に至る蘇蘭に於ける穀物及び家畜等の價格」と題せられて居て、講演には不適當かとも考へられる。或は彼の研究用の手控であつたかも知れない。スコットはこれだけはもつと後に書かれたものかも知れぬと考證して居る(p. 265, note 4.)。第三及び第四は分業及び水陸運送を取扱つて居る。殊に哲學者と運搬夫の例を以つて始まる最初のものはハチスンとグラスゴウ講義の中間を往くものであつて、その師の所説に從ひつゝこれを踏み越ゆる彼の進歩が示され、また分業の「本質」を分析して當時既に抱懷した彼の經濟思想の一端を表はし、その思想史研究上極めて重要なる文獻たることを示して居る。

（註）「道德情操論」第六版に至つて初めて省かれた贖罪に關する文章がこの一片に僅かの差異で以つて記されて居るので、それは一八三一年にアリストートルの著作中から發見されたといふ(Rae: Life. p. 429.) 道德情操論の草稿斷片でないかと疑はれて居る(W. R. Scott; Adam Smith. p. 58, note 2)。

三

アダム・スミスは一七五一年グラスゴウ大學の論理學教授に選任され、續いて道德哲學の講座の擔任を命ぜられた。しかし論理學の講義は一年だけで、第二年からは道德哲學のみが講ぜられた。彼がこゝでどんな講義を行つたか。彼の夙い頃の弟子であり、後にグラスゴウ大學の同僚となつたジョン・ミラア(註)の話が傳へられて居る。これは屢々の機會に紹介されて居るけれども、しかし彼の全思想體系に於けるその著作の位置を知るために必要であるから、次に引用して置かう。

「スミス氏は論理學の教授に任命されてから一年ほど經つた頃、道德哲學の講座に選任された。この問題に關する氏の講義の課程は四部に分れて居た。第一は神學を含んで居た。そこでは神の存在と諸屬性の證明及び宗教の基礎となる人心の諸原理を考察した。第二は嚴格な意味での倫理學で、後に主として彼がその道德情操論で公にした諸學説から成立つて居た。第三部では道德の中正義に關し、且つ精緻にして正確な規則を受容れるので、その故に充分且つ精細な説明をなし得る部門をより詳しく取扱つた。この問題に就いて、氏はモンテスキューによつて暗示されたと思はれる計畫に從つて、最も粗野な時代から最も開化せる時代に至るまでの公私兩法制の漸次に進歩せる跡を辿り、かの生活及び財産の蓄積に貢献する技術が法律及び政府の上に、それに相應する進歩と變革とを生ずる效果を指摘するに努めた。氏はその勞作のこの重要な部門をも同じく世間に發表する積りであつたが、道德情操論の結末に記されたこの意圖は、遂に之を遂行するに及ばずして逝去した。この講義の最後の部分では、正義の原則を基礎となさず、便宜の原則に基づき、一國家の富と力と繁榮とを增進せしむることを目的とするかの政治的諸制規を吟味した。この見地の下に、氏は商業財政宗教並に軍事的施設に關する政治的諸制度を考察した。」(Essays. p. xvii-xviii. 主として小泉博士前掲書譯文に據る。)

（註）ミラアは既にエデンバラ講演の聽講者の一人であり(W. R. Scott: Adam Smith. p. 63, 85.)、スミスが一七五一年グラスゴウ大學に迎へられた時には大學の課程を了へて居たのだけれども、再び彼の講義を聽いたのだと傳へられる(J. Rae: Adam Smith. p. 43.)。

講義の第一部に對してはスミスは特に興味を感じなかつたらしく、この部分に就いては今日何も殘つて居ない。またスミスに之れを著作で發表する計畫のあつたことも傳へられて居らない。第二部の倫理學に就いては一七五九年に道德情操論が公にされ、その最後の部分で「別の一論稿に於いて、啻に正義に關する事項のみならず、また、警察、收入、並びに軍備、及び苟も法律の對象たるべき爾餘一切のものに關する事項に於て、法律及び政治の一般原則とその社會の種々なる時期時代に於いて閲した樣々の變革とを記述せんと試みる」ことを約束した(Adam Smith: Moral sentiment. 1759. p. 551. 小泉博士前掲書三五頁)。こゝに警察とは、政治の下級部分の制規を構成する「清潔と安固」並びに「低廉即ち豐富」を指すのである(Adam Smith: Lectures on justice, police, revenue and arms, ed. by E. Cannan. 1896. p. 154.)。この約束は一部果された。すなはち「諸國民の富の本質と原因に關する研究」に於いて「少くもその警察、收入及び軍備に關する限り履行した」のである(Adam Smith: Moral Sentiment. 6. ed.)。他の一部分すなはち法學論及び政治論に就いては、彼は三十餘年後その歿年に至つて道德情操論第六版を出したときに、その序文で「殘る所のもの、即ち私が久しく計畫した法學論は今日まで本書の訂正を妨げた職務のためにその履行を妨げられた。私は既に老ひ、果してこの大著述を自分が滿足するやう遂行し得るや否や甚だ覺束ないけれども、しかし私は全然この計畫を放棄したのでなく、猶ほ出來る丈けのことを續けてゆきたいと考へて居るのであるから、私のこの言葉を、三十餘年前その表明する總てのことを實行し得るに就いて些かも疑ひを懷かなかつた時の儘に殘して置く次第である」と言つて居る(Moral sentiment. 6. ed. p. vii.)。この「全然この計畫を放棄したのでない」といふのは事實であつた。それは一七八〇年十月A・ホルトに宛てゝ「私の現在の地位(稅關監理官)は私の望み得る限り惠まれたものである。唯々一つ殘念なのは文筆の仕事が妨げられることであるが、これは職務上止むを得ない。私が豫ねて計畫する數個の著述は、そうでない場合よりも遙かに遲らされる模樣である」と近況を報じて居るによつても知られる(W. R. Scott: Adam(Smith, p. 284.))。しかしこの計畫は遂に實現されなかつた。ステュアートはスミスが稅關監理官に就任したことを、彼の職務は殆んど思考力を働かすことを必要としなかつたけれども、しかもその精力を費し、その注意を頒つに足つた。「だから彼の生涯が閉ざゝられた今日、それがもつと世に有益な、もつとその叡智に匹敵した仕事に用ひられなかつたことを悲しむことなくして、それ等が費した時間を回顧しない譯にいかない。彼がこの市(エデキンバラ)に移り住んだ最初の一年間は、彼の研究は全く妨げられたやうに思はれ、彼の學問に對する熱情は彼の餘暇を樂しみ、その會話を生氣あるものにするに役立つた丈けであつた。彼が極めて早く感じ初めた齡の衰へは、遂に彼をして猶ほ世と彼自身の名聲に負ふところあるを氣付かせたけれども、その時には既に遲かつた。彼が公約した著作の主要材料は既に久しきに亘つて蒐集され、彼が常に試みたかの組織的排列をこれに與ふるためには　極めて少數年月の健康と餘暇とを缺いたに過ぎなかつたらう」と殘念がつて居る(Essays. p. lxxxvi.)。

かくて吾々は彼の二大主著「道德情操論」及び「國富論」が彼の思想體系の中に占める地位を知るのである。けれども彼が教場に於いて行つた講義そのものに就いては、吾々は前記ミラアの談話以外に永く多く知るところがなかつた。スミスがこの講義を爲すに當つて自ら草稿を用ひたか、或は可成り詳細なノートを準備したであらうことは容易に想像される(W. R. Scott: Adam(Smith, p. 70.))。しかしこれ等草稿は總て生前に燒却せられ、「グラスゴウの教授であつた間に於けるスミス氏の講義は、道德情操論及び國富論で自ら發表した外は、どの部分も保存されて居らない」といふステュアートの言葉が一般に汎く信ぜられた(Essays. p. xv.)。然るに彼の歿後約百年この講義の第三及び第四部に當る部分の筆記がエドキウン・キャナンによつて發表された。「法學、すなはち正義、警察、收入、及び軍備に關す講義の筆記。一七六六年」Juris prudence or notes from the lectures on justice, police, revenue, and arms delivered in

the University of Glasgow by Adam Smith professor of moral philosophy, 1766 がこれである。この講義筆記が一七六六年に作られたことは標題紙の記載によつて疑ひないが、しかし一七六四年一月に既に彼が教授を辭して居ること、誤字のあるものが明かに耳からでなく目からであること等から、直接學生によつて講堂でとられたものでなく、また當時の蘇蘭學生の境遇と用紙及び裝釘とを考へ合せて、レエがその頃人氣教授の講義が學生のノートから轉寫されて店頭で賣られたといふ（J. Rae: Adam Smith, p. 64.）それでないことが明かであり、その表紙に殘された藏書票の殘缺からアレキザンダー・マレー Alexander Murray 即ち後のヘンダソン卿が猶ほ Younger を稱した時代に、スミスが教へた學生からノートを借りて書寫せしめたものと考證されて居る（E. Cannan ed.: Lectures on justice, police, revenue and arms delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, reported by a student, in 1763. 1896. p. xvii-xix; W. R. Scott: The manuscript of Adam Smith's Glasgow lectures, in "Economic History Review, Vol. III. 1931-32. p. 91-92; J. Bonar: Catalogue of Adam Smith's library.）。またこの講義が實際に行はれた時期に就いては、發見者キャナンはその內容から「多分アダム・スミスの辭職に先つ一七六三—四年の學年の一部に於いてか或は一七六二—三年の學年に行はれたものである。一七六一—二年以前に行はれたものでないことは殆んど確かであつて、一七六〇—一年以前に行はれたものでないことは絕對に確實である」とし（E. Cannan ed. Lectures. p. xix, xx.）、スコッドは講義の分量からこの筆記は一七六三—四年の不完全な一學年には不可能で、一七六二—三年に取られたものと考へて居る（W. R. Scott: The manuscript of Adam Smith's Glasgow lectures, p. 92; Adam Smith. p. 319.）。

その正確さは、本講義の各節を國富論の照應部分と對照して一應納得できるのであるが（E. Cannan, Lectures, p. xxii）、最近その行はれた直後即ち一七六三年夏若しくはその後に執筆されたと思はれる國富論の一部の「初期草稿」が發見されて、それが全く異例的に完全なものであること、筆記者がスミスの議論の異數な理解力の持主であり、思想の主眼點を保持しつゝこれを遙かに簡潔な形で再現し、しかも屬句警言を取入れることを忘れて居ないことが、一層明かにされた。しかしこゝに一つ例外がある。それは分配問題に關するものである。分配論はこの講義筆記では殆んど消失に近いまで壓縮されて居る。すなはち「初期草稿」で一八九一語を費して說明されて居るものが、こゝでは三二二語に短縮され、彼の思想の淵源に關し一の問題を投げ掛けて居るのである（W. R. Scott: Adam Smith, p. 322; E. Cannan ed. Lectures, p. 161; W. R. Scott: Manuscript of an early draft of part of The Wealth of nations, p. 429）。

この講義筆記はキャナンによつて、彼が在來の英國思想家に承繼いだものと佛蘭西フヰジョクラァトに學んだものとを區別し、その思想發展の跡を明かにして居る點に價値が認められるものとせらるる。スミスがグラスゴヴに於いてその少年時代教を受けたフランシス・ハチスンが彼に與へた影響は、レエが既に指摘して居るところである（J. Rae: Adam Smith, p. 13-14）。キャナンは講義筆記はこれに「積極的」證明を與へるものとするのである。すなはちハチスンの「道德學綱要」Philosophiae moralis institutis compendiaria libris Ⅲ. ethices et iurisprudentiae naturalis elementa tacontienens. 1745.（本書は一七四七年英譯されて A short introduction to moral philosophy in three books, containing the elements of ethicks and the law of nature. として出版された）、また後には「道德哲學體系」A system of moral philosophy, in three books, の取扱ふ問題がスミスの「講義」に現はれるものと殆んど同一であることから、「スミスがクレイギイのクラスにする講義を急いで準備せねばならなかつた時に、舊師の講義の自分の筆記に目を通し（彼のやうな立場にある多くの人々が、前にも後にもやつて來たやうに）、エデキンバラから携へて來た自分の講義案の序論及び結論として經濟問題を一纏めにした」と切に推量したい」といふのである（Lectures of Adam Smith, p. xxv-; Wealth of nations ed. by E. Cannan, p. xxxvi-, p. xli. 竹內謙二譯「國富論」上卷六五—六六頁）。猶ほこの問題に就いては財政經濟時報第二十七卷九月號小稿「フランシス・ハチスンの經濟學」を參照されたい。またフヰジョクラァトの影響に就いては、彼は講義筆記と國富論の內容を比較し

て、講義になく國富論に新たに附加へられたものとして、フヰジョクラアトの學說(第四編最終章)及び宗教と國家との關係を論ずる項(第五編第一章第三部第三節)を擧げ、「しかしこれ等の追加は、第二篇にストックまたは資本の理論と生產的及び不生產的勞働の理論を採り入れたこと、第一篇第六章の終りに近く分配理論が價格理論中に忍び込んで居ること、及び年生產の概念を力說することに較ぶれば、その意義は餘り重要でない。」「これ等重要なる變更は、言ふまでもなく、アダム・スミスが一七六四—一七六六年バックルウ公爵に伴つて佛蘭西を往訪した間に結んだ佛蘭西經濟學者との交友に負ふものであつた」と結論した(Wealth of nations, ed. by Edwin Cannan. Editor's introduction. p. xxlx-xxx.)。しかしこれはスミスが一七六三年即ち講義以前に佛蘭西文獻に通じなかつたことを前提としなければ言へない言葉である。從つてこの點に關して異論の存すべきことは容易に想像される。すなはちヒッグスはその頃既にフヰジョクラアトの全學說が世に公にされて居た。(彼はその例の一として一七五五—六〇年の「人民の友」Ami des hommes——その中には經濟表がその說明と共に載せられて居る——を擧げて居る。)スミスがこれを知らなかつたと言ふのは大きな獨斷である。スミスが一七六三年に深く佛蘭西學派の諸原理に染んで居なかつたことは明かであるが、しかしそれは「彼が一七六三年にこれと一致する限り、一七七六年にこれと無關係であつたとする主張を立證するものでない」とする(Henry Higgs: Lectureson justice, police, revenue, and arms, by Adam Smith. In "Economic journal", vol. vi, 1896. p. 611.)。而してこれに對しキャナンは、國富論がスミスの構想中に在つた一七四九年より一七七六年に至る二十七年の間に經濟思想の英吉利海峽を横斷して來往すること幾度、その進步發達の成果に就いて英佛相互の貢獻如何を爭ふが如きは無用であると應酬した(Wealth of rations, ed. by E. Cannan. p. xlvii-xlviii.)。しかし議論はこれで終結とならないで、前述國富論「初期草稿」の發見を繞つて、猶ほ新たに繼續されることゝなつて居る。これに就いては、私はなほ別の機會に觸れるであらう。

四

一七五九年アダム・スミスは、グラスゴウ大學道德哲學教授」としてその二主著の一「道德情操論」The theory of moral sentiments by Adam Smith, professor of moral philosophy in the University of Glasgow. Printed for A. Millar, in the Strand; and A. Kincaid and J. Bell, in Edinburgh. 1759 を公にした。本書は、經濟學聖典として彼の他の主著「國富論」に捧げられる榮譽の前に光りを失ひ、今日では專門家以外に殆んど聞えるところがない。恐らく一には倫理學の研究が前世紀に於いて別の方向に進み、本書で試みられるやうな經驗的心理的取扱ひが流行らなくなつたに由るものであらう。ヒュームの批評家でカンティアンであつたT・H・グリーンはその「通俗哲學」Papular philosophy in its relations to life. で彼とその同情說をあつさり批評し去つて居る。彼に據れば、道德情操と呼ばれるものは「人の習性に作用して行動を決定するに足るほど强くなつた時に吾々が德と呼ぶ、かの社會的幸福に對する關心の弱い形態」に過ぎない(J. Bonar: Moral sense. p. 170; T. H. Green: Lectures on the principles of political obligation. new imp. 1917. p. 246.)。しかし當時に在つてはそれは一の倫理學上の標準的著作であつたのであつて、一七六六年レッシングが「ラオコォン」Laokoon, oder über die Grenzen der Malerei und Poesie を書いた時に、贊成してゞはないが「十分理由ある」ものとして、その合宜に關する一節を引いた(Lessings Werke. Bd. III S. 28.; Adam Smith.)。また著者自ら三十餘年の後その第六版を上梓した時、「一七五九年の始めといふ夙い頃に初版を出して以來、綿密な改訂はその「常に志した」ところであつたと言つて居るところを見れば、スミスによつて本書が國富論よりも「遙かに高く評價された」といふエッグスタインの言葉も强ち誇張とのみ聞かれない(Moral sentiments. 6. ed. 1790. Advertisment. p. iv.; Theorie der ethischen Gefühle. Hrsg. von Walter Eckstein. 1926. Einleitung des Herausgebers. S. xxiii.)。

前にも述べたやうに、アダム・スミスは、この頃グラスゴウ大學にグレイギイの後を襲つて　恩師ハチスンの講座であつた道德哲學の講義を擔任して居た。道德情操論がこの講義を基に發展させ、公刊に適するやう纒め擧げたものであることは言ふまでもない。ダッガアド・ステュアートは、本書出版後彼の講義は倫理學に關する部分がずつと簡略にされ、法學及び經濟學原理に關する說明が增加されたと報告して居る(Essays. p. 1.)。本書に繰返しの多いことも その講義風な特徵を示すものと見ていゝ(J. Bonar: Moral sense. p. 174 Moral)。ミラアは、教授ほどスミス氏の才能に適したと思はれる地位はなかつた」と追想して居る(Essays. p. xviii)。道德哲學教授としての彼の名聲は高まり、たゞ彼の講座に列せんがためグラスゴウに留學するものも少くなく、その講義科目はその地の流行となり、その意見はクラブや文學會の議論の主題となつた(Ibid., p. xix)。彼の著作に對する、殊に蘇蘭人の期待が大きかつた。一七五九年四月十七日アダム・フアグスンは「この冬は蘇蘭出身の著者に就いて聽くばかりである。こゝ暫時スミスの著書を待ちあぐねて居る。私はミラア(A・ミラア、道德情操論の出版者)が――貴君は恐らく彼から直接もつと消息を得てられるのだらうが――この春の出版に若干疑念をもつて居ると聞くのは殘念だ」と書いて居る(W. R. Scott: Adam Smith, p. 237.)。しかしこの蘇蘭の學者の懸念は實は全く杞憂であつたので、著作そのものは既に四月を俟たないで出版されて居たやうである。スミス自身は「一七五九年の初め」であつたと言ひ(Moral sentiments. 6. ed. p. v.)、ヒュームは同じ年の四月十二日にその贈本に對し謝狀を送つて居る(Essays. p. xlvi; J. Rae: Adam Smith, p. 141; J. Y. T.; Greiged: The letters of David Hume. vol. i. p. 164.)。

本書は道德的是認及び否認が究局に於いて公平にして事情に通じた傍觀者の同情感情」の表現に歸着することを主內容とする。「人はどんなに利己的なものと想像されるとしても、その本性の中には彼をして他人の幸運に利害關係を感ぜしめ、他人の幸福を彼にとつて必要ならしめるある原理のあることが明白である。吾々が他人の困苦を見るか、或は如實にこれを想像せしめられる場合に、これに對して感ずる憐憫又は測隱の情は即ちこれに屬する。」吾々は他人の感ずるところを直接に經驗しないが、自分を他人の境遇に置いて想像することは可能である。「吾々は想像によつて吾々自身を彼の境遇に置き、自ら凡て同じ苦痛を忍受するものと考へ、謂はゞ彼の身體に入り込み、ある程度彼と同一人となつて、そこから彼の感覺を推測し、度はこれよりも弱いが、しかし全然違ふのではない或物を感ずる所までもゆく。」これが即ち同情である。「憐憫及び測隱の情といふのは、他人の悲しみに對する吾々の思ひ遣りを表はすために用ひられる言葉である。同情も恐らくもとは同じ意味であつたのだらうけれども、今や有ゆる感情に對する吾々の思ひ遣りを示すために用ひられていゝ。」(1st ed. p. 1-6.) 倫理的是否の原理となるものはこの「同情」である。ある人の行爲感情に同情するといふことは、これを道德的に是認することである。「主なる當事者の元の感情が傍觀者の同情感情と完全に諧和する場合には、それは後者にとつて正當且つ適當且つその目的に相當するものとして見える。」これに反し自分が相手の身になつたものとして感ずるところと一致しなければ、それは必然に　彼に不當、不適且つこれを惹起した原因に不相當であると見える。」(Ibid. p. 22.)。

本書に於いて道德の原理が同情に求められて居るに對し、國富論に於いては自利心の自由發動が是認推賞されて居ることは、從來屢々問題とせられた。而して「同情はその固有の領域として道德界をもち、利益が經濟界を支配する」といふのがその一の解釋であり(Ch. Rist Histoire des doctrines économique. 3. éd. p. 101.)、また「スミスは曾て『同情』を『仁愛』と同視したことがない。……同情は寧ろ利己心と完全に調和する」とするのが他の解釋である(W. Eckstein: Theorie der ethischen Gefühle. Bd. I.)。しかし理論の聯絡がどうあるにしても、著者躬らはそれ等を同一體系の部分と考へたことは、「情操論」初版終りの一節で、別の一論稿に於いて道德哲學體系の一部として「法律及び政治の一般原則とその樣々の變革」を記述

することを約し(p. 551.)。しかも第六版に至つて「諸國民の富の本質と原因に關する研究に於いてこの約束の一部分を果した、尠くも警察收入及び軍備に關する限りに於いては履行した」と述べて居ることによつて明かである(p. vii)。而してその連絡を示すものは、グラスゴウ講義の法學論の一節であらう。そこで彼は、人をして市民社會に入らしむるものに、權威と功利の二原理のあること、「優秀な富がこれ等素質――年齢その他――の孰れよりもより以上に權威附與の力ある」ことを說いた。これは貧者が富者に賴るところがあるからでない。一般に貧者は自立的であつて、その勞働でやつていく。最下級の勞働者の賃銀でも自活に事缺かない。しかも彼等は、富者から何等利益を期待しないのであるけれども、これに尊敬を拂ふ强い性向をもつて居る。「この原理は道德情操論で充分說明されて居る。そこではこの性向が、吾々と同等若しくは庸劣の者よりも優越者に感ずる同情が大であることから起るものなることが示されて居る。」(Lectures, p. 9.)(註)實際吾々は彼の全講義の第三部を構成した「正義論」を中間に置くことによつて、前記兩著の統一が求められるやうに思ふ。「正義の目的は侵害からの保障である。」(Lectures, p. 3, 5.) 自利的行動は正義によつて制約されなければならない。正義は彼によりその行政を國家に托された三義務の一である(Wealth of nations, ed. E. Cannan, vol. ii, p. 184-85; Glenn R. Morrow: Adam Smith, moralist and philosopher. p. 166-67. In "Adam Smith, 1776-1926." 1928.)。洵に敢へて道德論と國富論とのみ言はない。法學論――或は恐らく神學論をも――含め、彼の全思想は、尠くも彼に取つて同一構想の下に於ける一の完全な體系であつたに相違ない。言ふまでもなく彼に部分的に、また全體的に、餘りにも屢々矛盾撞著と思はれる理論が展開されて居ることは事實である。しかし私はスミスのこの問題に觸れる時、彼が社交の際不用意に漏す意見は偶然の事情とその時々の氣分によつて影響され、「彼の勝れた悟性とその哲學諸原理の不思議な統合から期待されるやうな齊一なものはないが、しかしそこには常に眞理と叡智の閃きがあり、「同一の問題に就いて異れる時に述べられる意見は、全體綜合すれば恐らく總括的且つ正當な決定をなす資料を提供するであらう」と言つて居るグッガアド・ステュアートの言葉を思ひ出さゞるを得ない(Essays, p. xciii)。

(註) 道德情操論「功名心の起原と階級差別に就いて」に於いてゞある、――「吾々がその富貴を誇り貧乏を隱すのは、人間が悲しみよりも喜びにより完全に同情を感ずる傾向をもつからである。……富者は、その富が自ら彼に世の視聽を蒐め、また人類は、彼の地位の優越がそんなにも容易く彼に與へるそれ等總ての快適な感情に於いて、彼に追隨する傾向をもつことを感ずるが故に、その富を誇るのである。」「富者及び權力者の有ゆる激情に追隨してゆく人類のこの傾向に、階級の差別及び社會秩序の基礎がある。」(1st ed. p. 108-14; 6. ed. p. 120-27.)

後世に對する影響から稽へて、國富論との關聯に於いて最も興味の多いのは、「功利の是認の情操に對する效果」を論ずる第四編の一節であらう。彼はこゝでその富の哲學とでも稱すべきものを開陳して居る。「天が憤つて功名心をもつて訪れた」貧民の子は、その周圍を見廻し、富と權力を極めて好ましいものとして憧憬し初め、「終生富と權勢の追求に努める。」その結果、彼は老年に入つてこれ等のものを獲得するのであるが、その曉に於いて彼はこれ等のものは眞にその取得に費された犧牲に價せず、また、眞の幸福とも殆んど交渉のないものであることを知るであらう。「彼が遂に富及び權勢がつまらぬ效用の裝飾に過ぎず、玩具愛好者の手筥ほどにも肉體の安易、心の平靜の獲得に適せず、またそれと同樣にこれ等のものが彼に供する總ての便益が便利であるよりも、これを身につけて居る人にもつと面倒をかけることを覺り始めるのは、その時、その身體が勞苦と病患に蝕ばまれ、その心は、敵の不正または友の忘恩不實によつて蒙つたと考へる許多の被害、失望の思ひ出に傷め亂さるゝ人生最後の餘燼に於いてゞある」と(p. 341.)。彼が富に對し初期に懷いたものは、かゝる蔑視的見解であつた。しかしこの場合にも彼は、人間

の勤勉を絶えず刺戟し活動させて」土地を耕し、都市を建設し、有ゆる技術學問を進歩させ、人生を高尚なもの、美しいものにし、また地球の全面を一變して原始林を快適な沃野とし、前人未到の不毛の海洋を生活の新資源、諸國民間の大道と變じたものは「この欺慢」であるから、「自然がこんな風に吾々を欺くのは仕合せといふものだ」と附加へて居る(Ibid. p. 348-49.)。而してこゝに彼が後に國民の富の本質と原因及びその最善の獲得手段の研究に生涯の最も收獲の多い時期を捧げた理由が見出される。

彼はまた續いてこの富の蔑視的見解から、彼の自然的自由論の根底に横はる、眞に經濟的樂天觀の基礎たるものを發展させて居る。彼は何人も知るやうに國富論で、各人が「一の見えぬ手に導かれて、その意圖に存せぬ效果を助成する」ことを言つた(Wealth of nations, ed. E. Cannan. vol. i, p. 421.)。吾々は既に本書に於いて「見えぬ手」に就いて述べられて居るのを見るのである。すなはち巨富の利益といふものは多く幻影に過ぎないが、しかし人間は頑固にそう考へないから、彼等は土地に勞力を加へて「自然的豐度を倍加しより多數の住民の維持」を可能ならしめ、その結果大國民の富と力とに對して適當な基礎を供給した。のみならず「眼は腹よりも大きい」から、大地主は假令冷酷無情であるにしても、「彼の胃腑の收容力はその莫大な願望に比例するものでなく、最も貧しい百姓のそれよりもより多くを受容れない。」彼自ら消費する少量の生産物を除いては、擧げて「自分では殆んど利用しないものを最もうまい仕方で調理して吳れる人々の間に、僅かしか消費されない宮殿の調度を整へる人々の間に、また貴人の經濟に用ひられる有ゆる種類のがらくたものを供給整理する人々の間に分配せざるを得ない。」その結果大勢の人々が、彼の贅澤と移氣から、その慈善若しくは正義感から期待することの出來なかつたかの生活必要品の分前を引出す」ことになる。かくして、土地生産物はいつの時代にも殆んどその維持し得るだけの數の住民を維持し、富者はその「無駄な飽くことを知らない欲望滿足」だけしかを追求しないとは言へ、事實に於いて「彼等の有ゆる改善の生産物を、貧民と頒け合ふ。」「彼等は見えぬ手に導かれて、土地がその全住民の間に均分されたとしたら、爲されるであらうと同一な生活必要品の分配を行ひ、かくて意圖することなく、また知ることなくして社會の利益を進め、種族增進の手段を提供する」といふのである(Ibid. p. 349-55.)。そしてこゝに於いて吾々はまた道德情操論と國富論とは繼兄弟(ステップ・ブラザー)ではなく、そこに濃き血の繋りあることを示す今一つの證據を加へるのである(An essay by Charles J. Bullock, in "The Vanderblue" memorial collection of Smithiana." 1939. p. vii.)。

五

アダム・スミスは道德情操論の公刊によつて、一躍第一流の著作家に列せられた。グラスゴウ大學當局の言葉を藉れば、「氏の高雅獨創的な道德情操論は、氏をして歐羅巴を通じ文學と教養ある人々の間に尊敬を贏ち得させた」(Essays. p. iii-iv, J. Rae: Adam Smith, p. 173. W. R. Scott: Adam Smith. p. 221.)。彼がそれによつて獲た世上の好評は、一七五九年七月十四日W・ロバアトソンが彼に送つた手紙によく現はれて居る。「吾々の友人ジョン・ホームが一昨日倫敦から當地へ到着した。貴君は澤山の人達から『情操論』の好評を聞いて居られると思ふけれども、ホームが齎らした消息をお傳へしない譯にいかない。氏は本書が有ゆる第一流の人々の手に行き亘つて居ることと、內容文體二つ乍らの故に多大の賞讃を博して居ること、及びこんな眞面目な主題の書物がこれよりも手篤い仕方で歡迎されるといふことは不可能であることを斷言して居る。貴君がオックスフォードで育たれたと聞くのは――それ故に彼等は貴君に權利がある――英蘭人にとつて大きな喜びである。」(W. R. Scott: Adam Smith. p. 239.)。しかしこれより先四月十二日に贈本の禮狀を兼ねてヒュームが書いた手紙ほど、本書が巷間に博した喝采を傳へて居るものはあるまい。彼はその中で「賢人の王國はその心である。またいつの日か更に求むるところがあるにしても、それは偏見を離れ、彼の事業を究め得る擇ばれた少數人の批判に

外ならないだらう。實際群衆の賞讃ほど强力な誤謬の判斷はない。フォーキオンが民衆の喝采を受けた時には、いつも大きな過ちを犯したのでないかと自ら疑つたことは、貴君も御存じの通りである。だから總べてこれ等のことを考慮し、正に貴君に最惡に對する備へあるものと考へて、貴君に貴君の本が極めて不仕合せであつたといふ悲觀的な報道をお傳へする。といふのは世人がそれを極端に賞揚しやうとして居るやうに思はれるからだ。本書は衆愚によつて或るもどかしさを以つて待たれて居る。文人の群は既に賞讃の聲を高々に擧げ始めて居る。三人の監督（ビショップ）はこの本を買ふため昨日ミラアを訪ね、著者のことを訊いた。ピイクァボロオの監督はその前晩をある仲間と過したが、そこでこの本が世界中の有ゆる書籍以上に稱揚されるのを聽いた」と友人らしい表現で賞めて居る。それは道德情操論が出て「僅か數週日」の間に認められたのであるが、また出版者ミラアがひどく欣んで「版の三分の二は既に賣れ、成功は疑ひない」と言つたとも書いて居る（Essays. p. xlvii; J. Rae, Adam Smith. p. 143-44; J. Y. T. Greig: Letters of D. Hume. p. 305.）。

エドモンド・バァクも本書の讃美者の一人であつた。彼はその書評を「アニュアル・レヂスター」に書いたが、それは次の如く好意に滿ちたものであつた。

「最近道德上の義務、感覺に就いて澤山書物が書かれた。人々は或はこの問題は總て盡されて居ると思ふかも知れない。しかしこの著者（スミス）は、この問題の考察の新しい、また同時に完全に自然的な道を開拓した。それが他の題目に就いての怜悧な新しさに過ぎないならば、唯々賞めて置いて差支へない。けれども苟しもこと道德に關しては、これほど危險なことはない。こゝでは理論は、その有ゆる本質的な諸點に於いて正しく、眞理と自由に基礎を置くものと吾々は考へる。著者は吾々の最も普通な、最も承認せらるゝ感情に正義、適正、合宜、適合の基礎を求め、是認及び否認を德罪の基準とし且つその同情に基礎を置くものなることを說明するに當つて、その單純な眞理から、恐らく曾て出現した最も美はしい道德理論構造の一を打建てゝ居る。例證は豐富巧妙であつて、著者が異常な觀察者であることを示して居る。彼の言葉は平易潑溂で、事を極めて明瞭に諸君の眼前に現出する。それは書物よりも寧ろ繪畫である。」（Annual register, or a view of the history, politicks, and literature, for the year 1759. 5th ed. 1769. p. 485.）

本書の書評：同じ年七月の「マンスリー・レヴュウ」にも現はれた。それはラルフ・グリフキスの筆に成るものであつたが、等しく本書を「罕れに見る敏感さと洞察力を示す」ものと賞揚した（The monthly review, or literary journal by several hands Bd. xxi. p. 1-18.）。

「道德情操論」は八折版一卷（五五一頁）の形で、倫敦アンドリュウ・ミラアから出版された。A・ミラア（Andrew Millar, 1707-1768）は著作家に理解のあつた蘇蘭出身の出版書肆である。彼は前にジョンソンの英語辭典を出版し、彼から「私はミラア氏を尊敬する。氏は文學の價値を高めた人です」と感謝されて居る（James Boswell: The life of Samuel Johnson. 1892. vol. i. p. 225.）。彼にはクムスン、ロバァトソン、ヒューム等蘇蘭出の學者の著述の出版が多い（Greig: Letters of D. Hume. vol. i. p. 112, note 1.）。彼は一七六七年に六五年以來その協同者であり、道德情操論の出版事項にも見えるT・カデルに業を讓つて隱退した（National Biography. vol. xiii. p. 400-01.）。このミラアから著者にその贈呈本に就いて報告して居る一七五九年四月二十六日附の手紙は、本書の出版時期、條件及びスミスの交友の片鱗を示すものとして興味が深い。彼はそこで著者の友人の言付により二十冊を贈呈本として發送したこと、うち十部は著者への納本とし、殘部に對して二磅（市場には一部六志で發賣された）を請求する旨を書いて居る。その被贈呈者の數人はヒュームが本書の「よき批判者」であると考へた人達である（W. R. Scott: Adam Smith. p. 238.; J. Rae: Adam Smith. p. 141-42.）。スミス傳研究の權威ジュン・レヱが本書が初め八折版二卷として出版されたと言つて居るのは、言語起原論が第二版に加へられたと誤まつて居ることゝ共に、何とも懷疑に堪えない。後者はステュアートが「そう信ずる」と書いて居るのを誤り傳へて居るのであらう（Essays. p. xl.）。

一七五九年七月二十八日のヒュームの手紙は、スミスが直ちに再版の準備に着手したことを傳へて居る。(J. Rae: Adam Smith, p. 145.)。しかしそれは一七六一年まで現はれなかつた。この新版の準備に際し、彼は多數の訂正と共に、私の注意を免れて前版に殘存する誤植があつたら正して置いて戴きたい。しかし他の點に關しては、お渡した案文に從つて、かなり精確に印刷せられたい」と申し送つた。また「自分の妻が不義をはたらいて居らぬのにその貞操を疑ふ夫よりも、自分の妻が不義を働いて居るに拘らずこれを潔白だと信ずる夫の方が餘程仕合せだ」といふ西班牙の諺を面白く引いて、「著作者から言つても、自分が正しくて、しかも誤れるものと考へて始終心配して居るものよりも、往々誤りを犯しながら自ら正しいものと信じて居る者の方がずつと幸福である」とも書いて居る(一七六〇年四月四日附書簡。J. Rae: Adam Smith, p. 149.)。これは一つには當時出版業者中に著者の承諾を得ないで改竄を加へるものが往々あつたことを懸念して書き送つたのでもあるが、しかし一面彼の學者としての着面目な性格を物語つて居るものでもあらう(高橋誠一郎教授「經濟思想史上の文献に就て」三田評論昭和七年八月一日號所載)。この注意にも拘らず第二版に多少の過誤は免れなかつた。一七六〇年十二月三十日に彼はストラアンに宛て、彼の書物の印刷に際して後者が犯した「許すべからざる聖靈に對する罪」に就いて書いた。この手紙はこの版が未だ公刊の運びにはなつて居なかつたかも知れないが、しかし印刷は既に成つて居たことを示して居るやうである(W. R. Scott: Adam Smith. p. 254.)。

本版に於ける改訂の主なものは、總べて同情が愉快なものであるならば、悲劇の涙から生れる快感の説明が困難だらうとのヒームの批評に對し(J. Rae: Adam Smith. p. 145.)、自己の立場を辯護せる一註記(3. ed. p. 76.)、及び行動する我と批判する我とを特に明白な言葉で區別して居る第三編の一節であらう(3. ed. p. 202.に據る小泉博士前掲書七〇—七一頁に引用されて居る部分がそれである。W. Eckstein: Einleitung. p. XXXVI.)。

一七六七年に出版された第三版には「言語起源論」Considerations concerning the first formation of languages and the different genius of original and compounded languages が添付され、標題にその旨を示す言葉が加へられた。スミスは一七四八—九年の冬からエデキンバラで文學講演を行つた。前に述べたエデキンバラ法學講演もその繼續として行はれたのである。彼はこの文學講演で「言語に關する(文法學者としてゞなく、修辭學者として、單純、雄健その他樣々の題目に適する文體の各種類若しくは特徴、文章の各部分の構造、自然的順序、適當な配列等々に關する一聯の優れた講義を行つた。本篇はこの散文の文體分析の序文を成すものと推測されて居る(W. R. Scott: Adam Smith. p. 51-52. cf. J. Bonar: Moral Sense p. 202.)。しかし何故にそれが本書に添付されたのか。本版の著者名から稱號を省き、單に「アダム・スミス」とされて居ること共に、特に著者の指令に據つたものであるが、その理由がわからない(J. Rae: Adam Smith. p. 234.)。

第四版は一七七四年に上梓され、始めて標題に「即ち、人々が以て先づその隣人の、次いで彼等自身の行爲と性格に關して自然に判斷を下すべき原理の分析に關する一論」An essay towards an analysis of the principles by which men naturally judge concerning the conduct and character, first of their neighbours, and afterwards of themselves の副題が添加された。また本版から出版業者がストラアンに替へられた。第五版は一七八一年の出版である。第四版には重要でない變更が纔か加へられたが、第五版は全く前版通りである(W. Eckstein. p.xxxviii.)。

第六版は一七九〇年に出された。スミスはこの年の七月十七日に逝いたのであるから、この版は著者生前の最後の版本である。而してグラスゴウ大學に藏せられる本版の一部には、その見返しにスミスの定まらない手蹟で大きく、尊敬するアーチバルト・アリンス氏「著者より」と獻辭が記され、彼が生前に本版の公刊を見て居る事實を證明して居る(J. Bonar: A catalogue of the library of Adam Smith. 2. ed. p. 169; cf. Essays. lxxxix.)。しかし本版は著者生前最終の版本であるといふ丈けでな

く、著者の死直前に出版され、その改訂は著者の學問上に於ける最後の業績、その思想の最も圓熟した最終の收獲である點に於いて重要である。彼はその勞のためさなきだに衰へた健康を害したほどであつた。彼は一七八九年三月三十一日カデル――本版から本書の出版者の一人に加つた――に宛てゝ「私は前便以來御申越の道德情操論新版の準備にいたく勞したので、健康を害しさくし、主として休養とすつと樂な仕事に就くため、こゝ數日中に稅關の常務に立ち歸ることを餘儀なくされて居る」と書いて居る（W. R. Scott: Adam Smith. p. 309.）。

彼は本版で最も重要な改訂を行つた。一方に於いて若干の削除を施すと共に、他方では可なり進んだ訂正增補を行つた。主なる改訂は第一篇第三部最終章、第三篇の最初の四章、第六、第七篇に加へられた。第六篇「德論」は本版に於いて全然新たに加へられたものであつて、第七篇では、從來諸章に散在したストア哲學に關する章句の大半を一箇處に纏め、且つ從來よりも詳細充分に說明せんとし　同じ篇の最後の章では、義務及び正直の原理に關する若干の義論が附加へられた（6. ed. Advertisement. p. v-vi）。その結果紙數は可成り膨脹したので、本書は本版に至つて上下二卷（四八八頁及び四六二頁）に分冊せられ、價格も初版より第五版まで六志であつたのが、ボール表紙で十二志に改められた。これ等の價格は國富論各版裏表紙見返しに記載されて居る。

本版出版の際カデルは、これは我國にその慣習のないことであるが、同樣の場合に增補分の別冊を刷らなかつたことを一再ならず非難されたといふので、その發賣を希望したが、スミスは「本書の性質」がそれを許さないとこれを許可しなかつた。この處置は書物の賣行を離れて、彼の學者的良心がそうさせたのだと解せられて居る（J. Rae: Adam Smith. p. 425-26; J. Bonar: Catalogue. 1. ed. p. x-xi. 高橋誠一郎敎授前揭論文、一二頁）。

本書は慶應義塾圖書館藏書に據れば、版數を數へられて居るものは、一八〇九年第十二版（グラスゴウ、チャプマンン版）まで出て居る。また異版は國富論ほど多數に行はれて居ないが、倫敦版（ボーン標準文庫もその一である）、デキンベラ版、ダブリン版、瑞西（ベーゼル版）、アメリカ版等相當行はれて居るやうである。本書は一七八四年匿名の譯者によつて佛蘭西語に移された。「心情形而上學」（Métaphysique de l'ame: ou, théorie des sentimens moraux, tr. de l'anglois de m. Adam Smith....par M.＊＊＊...Paris, 1764 がこれである。譯者は匿されて居るが、ホルベック男の示唆に、リマルク・アントアンヌ・エイドウス Mare-Antoine Eidous が試みたものであると言ふ（J. Rae: Adam Smith p. 196.）。この譯はあまりいゝものでなかつたから、彼の著書に對する讀書熱がこれによつて高められたとは思はれないが、彼がベックルウ公爵に伴つて佛蘭西に渡つた頃はこの國の啓蒙運動の最盛期で、哲學者は「巴里の王」とさへ言はれた時代であつたから、本書は文字ある人々に原文で讀まれ、數人によつて飜譯が考慮された。そして一七七四年にブラヴェによつて原著第三版からの飜譯 Théorie des sentimens moraus; tr. nouvelle de l'anglois de M. Adam Smith...Avec une table raisonée des matières contennues dans l'ouvrage, par M. l'abbé Blavet, Paris が出された。此飜譯の存在をフェル伯爵夫人から知らされた時、スミスは此夫人に宛てて「私が價する以上に其國で評價されることを最も好まない國民の言葉に、私の著作（道德情操論）がそんな風に飜譯されるのを見るのは、私の大きな心とするところであつた。貴女の寬容な親切は、私にこの苦痛を與へると共に、文人に寄せ得る最大の好意を示されたことになる。貴女が望まれるのだから私はその飜譯が讀んで見たい。若しもそれが可なり好奇心を唆らないものであるならば、拙著譯出の光榮を與へられた人の名が知りたい」と書いて居る（Recherchess sur richess des nations. Tr. par le citoyen Blavet. 1800. Préface. p. xxiv.）。本譯はその後譯者からスミスに贈られたらしい。「スミス文庫目錄」A catalogue of the library of Adam Smith, ed. by J. Boner 中にその贈呈本が收錄されて居る（1. ed. p. 106.）（2. ed. p. 171.）。そしてブラヴェは別の機會に、スミスがこれに對して「私は私の處女作の貴君の飜譯にひどく滿足し居る」と書いたと引用して居るのであるけれども（Recherchess sur richess des nations. Tr. par le citoyen Blavet. 1800. Préface de traduction. p. xxvi.）、しかしステュアートは、スミスがいつも道德

情操論が國富論が出るまで佛蘭西であまり注意を惹かなかつたのは、「一部はアッベ・ブラヴェの飜譯のせいだ」とした、と傳へて居る(D. Stewart: Works, vol. x. p. 86.)。またラ・ロシュフコウ公がブラヴェ以前から飜譯に着手し、プッフレエ・ルウヴェル伯爵夫人はその計畫を友人に漏らしたと言はれるが、何れも實現しなかつた(J. Rae: Adam Smith, p. 93, 199, 339.)。この外「テユルゴー氏」と稱せらるゝ人によつても試みられたやうである(Recherche, tr. par Blavet. 1800 p. xxv.)。一七九八年に第三の佛蘭西譯が出た。コンドルセー未亡人、グルシー夫人の Théorie des sentimens moraux ou essai analytique sur les principes des jugemensque portent naturellement les hommes d'abord sur les actions des autres, et ensuite sur leurs propres actions: suivi d'une dissertation sur l'origine des langues par Adam Smith, traduit de l'anglois sur la septième et dernièr édition par S. Grouchy...Elle y a joint huit lettres sur la Sympathie. Paris がこれであつて、クーザンはこれを忠實、流暢だと評して居る(Théorie, tr. par Mme S. de Grouchy 1860. p. xii.)。この飜譯は一八三〇年及び三八年に版を重ねられ(兩版共再版と印刷されて居る)、一八六〇年にH・ボオドリアールの緒言を附してギヨウマンから新版が出された。

獨逸では一七七〇年に第三版によるラウテンベルク Chr. G. Rautenberg の Theorie der moralischen Empfindungen von Adam Smith. Nach der dritten Englischen Ausgabe uebersetzt. Braunschweig. が譯者匿名で、一七九一―九五年にコオゼガルテンの Theorie der sittlichen Gefühl. Übersetzt, vorgeredet, und hin und wider kommentirt von Ludwig Theobul Kosegarten. Leipzig. が出版された。後者は第一卷は四または五版から、第二卷は第六版から譯出された。また近く一九二六年にウオルタア・エックスタイン Walther Eckstein がその優れた解說を附して Theorie der ethischen Gefühle を出した。その外の國では露西亞にビビコフの Teorüa nravstvennykh chuvstv. 1868 がある。本書には邦譯はない。

私はこゝで遂に彼の不朽の名著「國富論」を取扱ふべき時に來た。しかし既に餘りにも彼の前半生の業蹟に就いて筆を費し過ぎた。私は更に別の機會に本稿を續けたいと思ふ。

南三井家交通記錄集

野村兼太郎

徳川時代の旅行がどんな狀態であつたかについて、今日とは全く違つて今となつては想像にも及ばぬやうなことが多い。「旅は道づれ世は情け」といひ、「可愛い子に旅させろ」といひ、旅は憂きもの辛いものと考へてゐた。江戸から京大坂に行くのは勿論、鎌倉、大山あたりに出かけるのさへ相當の旅行であつた。況んや仙臺、それから奥へかけての旅は大旅行であつた。旅は世間を知る修業の方法でもあつた。

かうした時代に旅に依つて得らるゝ知識や經驗は相當大であつたらうと思はれるのに、案外それらの知識や感銘を後に遺してゐる旅日記の少ないのはどうしたわけか。美文を連ねて景色を賞したり、案内記のやうな名勝古蹟の記述は多いが、旅の實感がにじみ出るやうな旅行記は極めて少ない。自己の經驗を赤裸裸に語ることをむしろ恥とした時代の風に禍されたこともあらう。又旅宿についても落ついて感想を整理し得ないほど交通宿泊の設備も出來てゐなかつたがためでもあらう。旅の費用を詳細に記述したものさへあまり多くはない。ところどころに思出したやうに費用を記してゐるが、全體でどのくらゐかゝつたのか、各地での金錢の相場はどうだつたか、あまり明記し